

ロールシャッハ法と神話

— 心理療法との類似性を起点として —

角藤 比呂志

1. はじめに

神話やおとぎ話の研究が心理療法において治療の有用性を持つことを提唱したのは、主に、ユング派の功績である。本号の特集テーマである「神話と心理療法」は、筆者にとって大変な難問となった。なぜなら、筆者は、ユング理論及び神話には「しんわ」性がなかった。筆者は、ロールシャッハ法を臨床的基盤に置きながら、心理臨床に携わってきたが、今にして思えば、ロールシャッハ法は、ユング理論に近接しているながら、ユング理論を直接的に取り入れた研究者（臨床家）が少ないことは驚きに値する。

一方、筆者は、ロールシャッハ法を通して心理臨床の基礎を学び、ロールシャッハ法と心理療法は極めて類似した過程であることを実感してきた。

そこで本論では、まずロールシャッハ法と心理療法過程の類似性について触れ、次にロールシャッハ法と神話との関係性を模索してみたい。そうすることで、「神話（＝ユング理論）と心理療法（＝ロールシャッハ法）」に少しでも近づけたらと思う。

2. ロールシャッハ法と心理療法の類似性

ロールシャッハ法は、周知の通り、10枚のインクのシミでできた図版に対し「何に見えるか」を問う投影法の一つである。また、投影法の中でも特に検者と被験者との相互関係性（interaction）が影響する技法であり、図版を媒介にした半構造化面接と考えることができる。施行段階は、自由反応段階と質疑段階に分かれ、それぞれが心理療法過程と類似性を持っている。

(1) 自由反応段階

自由反応段階は、「何に見えるか言って下さい」という簡潔な教示の下に、被験者に「自由に」反応してもらう段階である。

ここでの反応生成過程について、Rorschach (1921)は「反応は刺激図形によって引き起こされた感覚と記憶痕跡の統合によって生じる」と考えた。

その後、反応過程について追跡研究は行われてこなかったが、1986年Exnerが実証的な研究を報告した。

まず、アイカメラを用いた実験では、1枚の図版について約0.5秒で図版全体を被験者は知覚していることがわかった。ところが、実際の平均初発時間は5.79秒かかっており、その間に何かが起こっていると考えられた。

次に、1枚の図版につき60秒間なるべく多くの反応をするよう教示し、ひとつの反応につき10セントの報酬を与えた。その結果、ひとりあたり平均104個もの反応が見られた。実際の平均反応数は20～30個であることから、「反応にならない潜在的な反応があるのではないか」と仮説を立てた。

では何によって反応が生じたり生じなかったりするのか？この疑問を実証するために、彼はさまざまな実験を繰り返し、次のような反応過程の段階を提唱した。

第1段階：まず図版刺激の視覚的入力を経て、刺激とその部分部分の分類及び潜在的反応のランク付けが行われる。この際、図版の特性や反応内容が見慣れたものであるかどうかなどが影響する。

第2段階：低いランクの潜在的反応が棄却され、さらに検閲によってその他の潜在的反応が

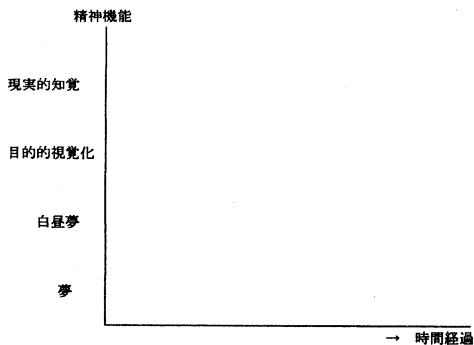
棄却される。この段階では、時間や努力の節約といった経済的原理や被験者の構え、価値観、検者との関係性が影響する。

第3段階：心理特性や心理状態により、残っているいくつかを選び出す。

このExnerの考え方は、主に認知（情報処理）過程からの見解であるが、精神分析的観点からの指摘もある。

Schafer(1954)は、精神機能レベルの変動という視点からロールシャッハ反応の生成過程を説明した。以下にそのモデル図式を示そう。

図1、精神機能レベル



つまり、我々の精神機能は、時間経過に伴い、現実的知覚、目的視覚化、白昼夢、夢といった水準を移動しているのである。現実的知覚から夢に向かうことを退行という。

ロールシャッハ法の過程の中では、精神機能の変動に伴い、現実と空想、独創性と陳腐なもの、正確さと不正確さ、反応の数・場所づけ・決定因の多様性、反応・テスト状況・検者に対する態度などが変化する。

これらの水準をどう移動するかによって自我の弾力性が決定されることになるが、退行を促進する要因と抑制する要因とがある。前者には、現実的知覚と自由な空想の混合を要求するテスト指示の性質、反応内容を具体化するための機会、外的な手がかりが乏しいことが含まれる。後者には、外的手がかり（インクのシミ）があること、反応の言語化、防衛的自我機能と不安

信号、適応的・総合的な自我の態度と機能が含まれる。

例えば、芸術家は、現実的知覚から夢まで容易に退行し、縦横無尽に変動しながら現実的知覚を失わない（創造的退行）。一方、強迫的で堅い（rigid）性格の人は、現実的知覚から退行することができずに陳腐な反応となってしまう。つまり、現実的知覚からどう退行しどう回復するかによって自我の弾力性（自我の強さ）が決定されるのである。

以上をまとめてみると、反応の生成過程は、インクのシミという刺激によって感覚が喚起され、記憶痕跡との統合により反応が生じるが、その統合の過程においてさまざまな要因が関与し、潜在的反応の棄却と選択が行われることになる。そして、さまざまな要因の中には、図版の特性、反応内容の性質、被験者の心理特性と心理状態といった被験者の内と外の要因及び検者との関係性が含まれる。

ここで、図版刺激を、われわれが行う心理療法場面での治療者（あるいはクライアント）に置き換えてみると、反応生成過程はクライアント（治療者）の心的過程と同一であると考えることができる。

つまり、治療者（クライアント）が刺激となつて、クライアント（治療者）の記憶痕跡が喚起され、さまざまな要因により棄却・選択された結果、語りとして現れる。

また、反応は、時間経過に伴い精神機能レベルが変動する結果、現実的知覚と視覚的イメージ（目的視覚化・白昼夢・夢といった非現実性）の間を移動することになる。

これはまさに心理療法過程における心理的变化（推移）、退行、転移・逆転移を理解するための概念モデルとなり、神話への扉を開くと考えることができる。

つまり、反応生成過程は心理療法面接の横断面と、精神機能レベルの変化は心理療法面接の縦断面と同一のように思えるのである。

そして次に述べる質疑段階においてその類似

性はさらに顕著なものとなってくる。

(2) 質疑段階

質疑段階は、自由反応段階での反応を、検者と被験者が共有し、反応が図版のどこの部分で（反応領域）、図版のどんな特徴から（決定因）、その反応（反応内容）に見えたかを話し合う段階である。また被験者にとっては、自分の反応をさらに推敲する段階でもある。

換言すれば、この段階は、まさに「反応」と刺激図版を媒介に検者と被験者が対話をする場なのである。対話とは、単なる言葉の交流ではなしに、言葉に乗せて互いのイメージを交換する場である。神田橋(1997)は、「コトバはイメージを運ぶ荷車だと気づいて面接の核心をつかんだと感じた」と述べている。

具体例を示そう。例えば図版1の自由反応段階で被験者が「コウモリ」と反応したとする。この時点では、どんなコウモリを見たかについて検者は何の情報も得ていない。しかし、検者自身も被験者の「コウモリ」という言語刺激と図版刺激によって、ある種の「コウモリ」のイメージを抱いているのである。これを「検者のコウモリ」としよう。仮に、この「検者のコウモリ」はプロット全体に対し「飛んでいるコウモリ」を見たものだとする。次に、質疑段階において反応の説明を求めると、被験者は「そうですね。この部分だけ見て黒いから」と答えたとする。

この時点で、検者と被験者のイメージがずれていたことが明らかとなり、検者が自らのイメージを修正し被験者イメージに合致させることにより、合意に達する(Consensus Validation)。こうして、検者は被験者が刺激図版の一部分に（反応領域）、黒い色をした（決定因）コウモリ（反応内容）を見たことを了解する。

「コトバはイメージを運ぶ荷車である」とすれば、こうしたイメージの摺り合わせは、治療

的な対話場面では常に行われていることであるが、ロールシャッハ場面のほうが容易である。なぜなら、お互いのイメージは、インクのシミという現実刺激により規定されており、さらには、反応領域、決定因、反応内容というカテゴリーの中に分類することが検者には義務づけられているからである。

図版を媒介としない対話では、お互いのイメージのよりどころが、内的体験に依拠しているためにイメージのずれが大きくなりやすい。心理療法を志す者は、このずれを最小限に留めるために、スーパーヴィジョンや自己分析あるいは教育分析の必要性が重要視されるわけであるが、実はロールシャッハ場面においても初学者の場合にはこのずれが大ききことが多い。

つまり、検者自身の投影が先行し、主観的な歪みが生じやすいのである。しかし、ロールシャッハ場面においては刺激図版という現実(reality)が介在するために検者(治療者)自身のイメージの歪みに気づきやすいという利点がある。これが、自己分析あるいは教育分析の役目も果たすことになり、ロールシャッハ法が心理療法の基礎訓練となり得る所以となる。

このように考えてみると、心理療法場面においてもロールシャッハ場面においても、言葉に乗せたイメージの交流が行われるのであり、両者の相違点は、イメージが何によってどの程度規定されているかに過ぎない。

3. ロールシャッハ法と神話

ロールシャッハ法が心理療法と多くの類似性を持つとすれば、神話はロールシャッハ結果にどのように現れるのだろうか？神話を意味あるものとして心理療法の中に位置付けたのは、分析心理学を創始したJungである。そのため、この課題に取り組む前に、主にRorschachの軌跡をたどりながら、二人の接点を探ってみたい。

(1) RorschachとJungの接点 (表1参照)

表1. RorschachとJungの対照年譜

年	年齢	Rorschach	年齢	Jung
1911	27	インクプロットの実験開始 精神分析に熱中し中断	36	フロイトらと国際精神分析学会創立、初代会長となる
1912	28	「反射幻覚とその類似」 (学位論文) 「失敗した昇華の一例と名前忘却」 「もうろう状態での馬泥棒」	37	「リビドーの変容と象徴」
1913	29	「一精神分裂病患者の絵に関する分析的覚え書き」 「神経症患者における友人の選択について」 奇妙な宗派の存在を知る	38	分析心理学を樹立
1914	30	「一精神分裂病患者の素描の分析」	39	
1915	31		40	
1916	32		41	「超越的機能」
1917	33	「連想実験、自由連想及び催眠を用いての健忘の除去」 「スイスの宗派と宗祖に関する若干の考察」 ヘンスがインク実験で学位取得	42	
1918	34	インクプロットの実験再開	43	
1919	35	「スイスの宗派形成に関する付加的考察」	44	
1920	36	「知覚診断的実験について」	45	
1921	37	6月「精神診断学」公刊	46	「心理学的類型論」
1922	38	4月2日腹膜炎のため急死	47	

Rorschachが、学校教師Gehringと共同で、インクプロットを使った実験を始めたのは1911年であった。この時彼は、才能のある子供はそうでない子供に比べ豊かな想像力を示すか否かを研究したが、同時にJungの言語連想法との比較

も行った。ここにおいてすでに二人の接点を見ることができる。

その後、彼は、インクプロットの研究を中断し、精神分析学に熱中する。

1909年～1913年、チューリッヒには精神分析

グループが存在し、Bleuler、Jung、Binswangerなどが属していた。この頃、RorschachはBleuler教授の下、チューリッヒ大学医学部で専門教育を受けており、員外講師であったJungの講義を受けている。

精神分析に関心を寄せたRorschachは、1912年～1914年の間に、学位論文を除くいくつかの論文を精神分析学関係の雑誌に載せている。(表1参照)

中でも、「もうろう状態の馬泥棒」では、連想実験を補助手段として用い、1917年には、スイス陸軍の兵士に対し行った「連想実験、自由連想及び催眠を用いての健忘の除去」についての論文を発表している。

この連想実験は、「今から単語を一つずつ順番に言ってゆきますので、それを聞いて思いつく単語を一つだけ何でもよろしいから言って下さい」と教示し、100個の刺激語を提示しながら反応語と反応時間を書き留めてゆくものである。全部の連想が終わった後で「もう一度繰り返しますので前と同じことを言って下さい」といって再検査する。この結果、コンプレックスの存在によって連想過程にいくつかの障害が生じる。すなわち (1) 反応時間の遅れ、(2) 反応語を思い付けない (3) 刺激語をそのまま繰り返して答える (4) 明らかな刺激語の誤解 (5) 再検査の時の忘れ (6) 同じ反応語が繰り返される (7) 明らかに奇妙な反応 (8) 観念の固執などである。(河合、1967)

ロールシャッハ法と言語連想法の相違は、前者が構造の曖昧な「絵」刺激(視覚刺激)を用いるのに対し、後者は明瞭な「言語」刺激(聴覚刺激)を用いているという点にある。しかし、そこに現れた結果には多くの共通性が見られることに驚かされる。つまり、前述の連想過程の障害をロールシャッハ法に置き換えてみるならば、(1)はそのまま初発反応時間の遅れであり、(2)は反応拒否、(3)はStain反応、(4) (7)は形態質の不良反応、(5)は反応の忘却、(6) (8)は反応の反復あるいは保続・固執に該当するよう

に思われる。

さて、この年(1917)にはもう一つ大きな出来事があった。

Hensが「不定形のシミを用いての学童、正常成人及び精神患者の空想の検査」(チューリッヒ、1917年)により学位を取得したのである。この研究は、インクのシミ判断の内容を分析したものであったが、Rorschachは形式的なものの方がずっと意味深い成果をもたらすに違いないと確信し、翌1918年から再びインクプロットの実験を開始したのである。

そして、1921年6月「精神診断学」を公刊したが、その中で「偶然的形態の判断は直接想像力の働きによるところはわずかであって想像力を実験の前提条件とする必要はない」「偶然的な図形の判断はむしろ知覚や解釈の概念に属するものである」と述べた。

こうした考えの下に、ロールシャッハ法の基本概念になったのが「体験型」である。Rorschachは、反応の比率が、運動優位であるか色彩優位であるかによって、前者を内向型(introversion)後者を外拡型(extratension)と呼んでJungの内向(introversion)・外向(extroversion)と区別した。彼は、「精神診断学」の中でJungの用語の借用について「ほとんどただ名前だけを共有しているにすぎない」と述べている。しかし、Bash(1937)は「一致している」と主張し、Rorschachが死の3ヶ月前にRoemerに宛てた手紙を紹介している。そこでは「私はこれらの問題においてはJungに近づかざるを得ません」と述べており、ここにおいても再び二人の接点を見ることができる。また、Rorschachの「精神診断学」が公刊された同年に、Jungの「心理学的類型」(1921)が世に出たことも興味深い。

ところで、1911年にインクプロットの研究を中断し精神分析に傾倒していったRorschachは、1913年にシュンジンケンに滞在中、ある奇妙な宗教的分派の存在を知る。

そして、「スイスの宗派と宗祖に関する若干の考察」(1917)の中で、「ヒステリー患者であ

るビンゲリ（宗祖）は、地方的迷信、魔術的及びシュワルシェンブルク地方の低次の神話の中に消えます。これに対し、統合失調症であるウンターネーラー（宗祖）は、低次の神話を魔法医として好んで利用するにもかかわらず、その教義においては殆ど完全にそれを越え出ています。彼の妄想体系は、高次の神話の、深く人間の魂に刻み込まれた大きな轍に従い、人類の歴史の中で獲得された無意識の素材を、ビンゲリよりももっとずっと直接的に、人間の内部に響かせます」と述べている。（Bash, 1937）

つまり、彼は、宗派のリーダーを、個人的コンプレックスに由来する「低次の神話」を含む神経症的予言者と、無意識の深層の元型に遡る「高次の神話」を含む統合失調症的な予言者の二つタイプに分けたのである。

ここにおいても、神話を通して、二人の接点を見ることができると。Rorschachの妻によると、「前から彼は『空想』に関心を寄せており、『空想』を人間における『神の火花』とみなしていた。古代的な思考や神話形成や神話は彼をとりこにした」という。

であるとすれば、なぜRorschachはロールシャッハ法において内容分析や象徴解釈を排除しようとしたのだろうか。

Bash (1937)によれば、Rorschachの宗派研究の中に本来の「内向の仕事」を見ることができるのであり、「精神診断学」は「外向の仕事」であった。そして、この転換にはRorschach自身の心理的危機が作用していたのであり、その根底には次のような過程があったとする。

つまり基本的に内向性であった彼が、ビンゲリと運命的な出会いをし、さらに内向方向に押し進められた。危険な敷居までに追い込められ、反対方向への歩みをもたらしたのが「精神診断学」であった。「これらの実験はあの内向相における反自然工作（Opus contra naturam）であった」という。

またEllenbergerは「Rorschachが37歳で死んだこと、つまりJungが『人生の転機』と呼び、

しばしば人生の危機を伴ってやってくる時点で死んだことは偶然であろうか」と意味深長な言葉を残している（Bash, 1937）。

では、JungはRorschachをどう見ていたのだろうか。

Jungが亡くなる4年前、1957年に、Richard Evansに語ったRorschachについてのコメントは大変興味深い。

Evans (E) : Herman Rorschachをご存じだと思いますがいかがですか。

Jung (J) : いや知りません。彼はいつでも私を出し抜いていました。

E : でも個人的に会われたことがあったのではないですか。

J : いや、彼と会ったことは1度もありませんよ。

E : 彼の“introversion”とか“extratension”という用語は、当然あなたの内向—外向の概念をひきうつしていると、私自身の考えでは見えるのですが・・・

J : そうです。しかし、迷惑を受けたのは私です。つまり、それらの概念の輪郭を最初に示したのは私ですから。ご存じのようにそれは許せないことです。断じて許せません。

E : ところで、Rorschachとは、本当に個人的な接触がなかったのですか。

J : 個人的な関係は全くありません。

E : インクプロットを使ったRorschachのテストはご存じですか。

J : 知っています。しかし使ったことはありません。つまり、言語連想テストですら、後にはもう使わなかったのですから・・・精神的諸反応の厳密な検査から学ぶべきことは学んだつもりです。そしてRorschachのテストは、非常に優れた手法だと思っています。（Mc Cully, 1971）

JungがRorschachを覚えていたかどうか定かではないが、彼の業績を認めていたことは確かである。

(2) ロールシャッハ法と神話

さて、神話は諸学者によりさまざまな定義があるが、織田(1999)は神話について次のような三つの見方を提示している。(1)ある民族や文化を基礎づける機能をもった、人間と超越者たちとの交流の物語(2)平時には、地下水のように表面に現れないが、個人や国家や民族や文化の、危機的状況にあるときには顕在化するという特徴をもつ(3)われわれの個性を無視するような普遍性を帯びている。このような意味を持つ物語を「神話」と考え、「狭義の神話」と呼んだ。

他方、個人の生来的なものの影響や親子関係や成長過程でのさまざまな体験によって形作られ、個別の価値観やこだわりを持ち、生を支えるものあるいは基礎づけるものを「広義の神話」すなわち「個人神話」と呼んだ。そして心理療法過程においては、患者のみならず治療者自身も「個人神話と神話に同等の価値を置き、両者の対応関係を検討する」ことの大切さを説いた。(ここでの「狭義の神話」は、Rorschachの宗派研究における「高次の神話」に、「広義の神話(個人神話)」は「低次の神話」に該当するように思われるのであるが、如何だろうか?)

神話の研究がわれわれの深層心理の理解に役立つのは、周知の通り、Jung独自の心の構造理論に基づいているからである。Freudが神経症者を対象に無意識(個人的無意識)を発見したのに対し、Jungは精神病者やより重い症状を持つ人々の治療を通して集合的で普遍的な無意識を想定した。そしてこの集合的無意識あるいは普遍的無意識を知る方法として神話の研究が重要視されたのである。

では、ロールシャッハ法において、個人的無意識あるいは集合的無意識はどのように考えられてきたのであろうか?

Rorschach自身は、「精神診断学」の中で、「(夢判断、連想実験、他の深層心理学的方法と比較して)このテストは、無意識にせまる方

法とは考えにくい」と述べながらも「判断の内容と総体判断とを比較することによって、ときどきある無意識の傾向があらわれることがある。たとえば、強い内向型のふたりの被験者。ひとりには、多量の伸張運動感覺的判断を行い、他方は必ずばぬけて多くの屈曲運動感覺的判断を行った。・・・もし前者は図版のうちに情緒的戦いを見、後者はキリストの姿、神々しい後光、殉教者を見、そのさい両者が色彩ショックを示すならば、結論として、前者は神経症的抑圧と不満足に反抗し、悩んでいるが、後者は内心において自らを聖なるものとみなし外面には無関心である、といてよいであろう。・・・とくに多くの独創反応を示すときにのみ、これは可能である。」と述べ、体験型が内向型である人の一部に無意識あるいは集合的無意識を投影する人々がいることを示唆している。

しかし、ロールシャッハ法の原点は「偶然図形の判断に基づく知覚診断的実験」であるため、内容分析・象徴的解釈は重要視されてこなかった(この点は現在でも同様であり、筆者の経験からしてもそれは臨床的に妥当なことであると思われる)。

その後、理論的「背景」として分析心理学に依拠しながらも、直接的に分析心理学用語を駆使しロールシャッハ法を解釈する人はほとんどいなかったが、1971年、Mc Cullyがユング心理学によるロールシャッハ解釈の著書を公刊した。

その中で彼は、元型的な視覚イメージから神話との関連や象徴的解釈に基づき集合的無意識へとアプローチしている。

彼によると、例えば図版Iの中央のD領域は、旧石器時代の豊饒の小立像に酷似しており、その意義は、豊饒の象徴としての女性トルソーの生殖力の周辺に集中しているという。また、この小立像には頸幹が二つある(図版に突起が二つある)ものが存在し、女神と巫女、母と娘といった1世代間における役割の統一を表すと同時に、一にして二つなるものという観念、つまり女神の二重性(養育と破壊)を象徴している。

被験者は、40歳の女性で、アスペルガー障害を疑われている人である。彼女によると、長い間「私は人と違う」という悩みに苦しんできた。ある時、書店で手にした本から自分が自閉症ではないかと思ったという。

プロトコル(表2)を見ると、彼女の言葉の端々から、彼女が共存の世界と自閉の世界という二つの神話を生きてきたことが読みとれないだろうか。

ロールシャッハ法における神話の現れは、おそらく精神機能レベル(Schafer, 1954)が退行した状態で起こるのであろう。そしてプロトコル全体は、内向型で、作話的傾向を含んだものとなるように思われる。解釈技法は、内容分析あるいは象徴解釈となるが、被験者についての現実的情報が不可欠であり、なおかつ、検者の単なる主観的意味付けには注意を要する。象徴的解釈に専心したMc Cully(1971)でさえも、「われわれは決定に際しては理論ではなくデータに依拠するものである」と述べている。

4. おわりに

ロールシャッハ法を心理療法との関連で解説し、Jungとの接点、及び神話との関係性について述べてきた。

何分にも筆者の力量不足のため、神話とロールシャッハ法との関係を十分に語ることはできなかったが、Herman Rorschach自身が神話に興味を持ち、自らの心理的危機を脱するためインクプロットの知覚実験へと向かったというBashの説には驚愕するものがあった。

つまり、ロールシャッハ法は、Herman Rorschach自らが神話を生きた結果、生まれてきたものであると言えるかもしれない。

参考文献

- Bash, K.W. 1937 Hermann Rorschach Ausgewählte Aufsätze. Zusammengestellt und herausgegeben. Bern: Hans Huber. (空井健三、鈴木睦夫訳 1986 ロールシャッハ精神医学研究 みすず書房)
- Exner, J.E. 1986 The Rorschach: A Comprehensive System Volume 1: Basic Foundation. New York, John Wiley & Sons. (高橋雅春他監訳 1991 現代ロールシャッハ体系 上 金剛出版)
- 神田橋條治 1997 対話精神療法の初心者への手引き 花クリニック神田橋研究会
- 河合隼雄 1967 ユング心理学入門 培風館
- Mc Cully, R.S. 1971 Rorschach theory and symbolism: A Jungian approach to clinical material. Baltimore: Williams Wilkins. (片岡安史他訳 1977 ロールシャッハ象徴学—ユング心理学による解釈 新曜社)
- 織田尚生 1999 ユング派の方法論と神話 東洋英和女学院大学心理相談室紀要3、28-31
- Rorschach, H. 1921 Psychodiagnostik: Methodik und Ergebnisse eines Wahrnehmungsdiagnostischen Experiments. 7 Aufl. Bern: Hans Huber. (東京ロールシャッハ研究会訳 1964 精神診断学—知覚診断的実験の方法と結果 牧書店)
- Schafer, R. 1954 Psychoanalytic interpretation in Rorschach testing. New York: Grune & Stratton

